発掘された日本列島 2004

地域展示

「出土遺物から見た奈良市の歴史」

Part1 奈良市美術館

開催にあたって

奈良市が1978（昭和53）年に最初の発掘調査を実施してから、2004（平成16）年で、27年目をむかえます。この間、平城京跡では、宅地や寺院の様子がしだいに明らかになってきました。また、平城京より前の時代・後の時代の遺跡についても、平城京跡と重複して、あるいはその周囲で新たに発見されたものがあります。今日では、遺跡から奈良市の歴史が語れる程までになってきました。この間の調査で出土した遺物の量は、おびただしい数になっています。

考古学で歴史を語るには、遺跡、遺構、遺物という三要素が必要です。これらを組み合せてこそ、歴史として成り立つものですが、遺物のみでも歴史を語ってくれるものがあります。

地域展「出土遺物から見た奈良市の歴史」では、この26年間に出土した遺物の中から、こうした歴史を語る遺物を選び出し、ご覧いただこうと思います。

また、発掘調査によって発見された埋蔵文化財のなかには、貴重なものとして、奈良市が指定した文化財（史跡が4件、考古資料が2件）があります。埋蔵文化財調査センター会場では、これらの指定文化財を遺物やパネルで紹介し、ご覧いただこうと思います。これらを通して、文化財に対する理解が深まり、奈良市の歴史の一端にふれていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の展覧会を開催するにあたり、ご協力いただいた関係機関各位に心より感謝申し上げます。

平成16年10月12日

奈良市長　鍵田　忠兵衛

例　言

1. この冊子は、平成16年10月30日から11月28日まで、奈良市美術館で開催する「発掘された日本列島　2004」の地域展示「出土遺物から見た奈良市の歴史」（一部は、平成16年10月12日から12月27日まで、奈良市埋蔵文化財調査センター展示室）の解説パンフレットです。
2. 橿原市教育委員会、大和郡山市教育委員会には、出品の御協力をいただきました。本書に収録した写真の一部には、上記の機関から提供を受けたものがあります。
3. 本書の編集・レイアウトは、埋蔵文化財調査センター職員の協力のもとに、森下浩行がおこないました。

杣ノ川イモタ遺跡の縄文土器
（左頁）

杣ノ川町から出土した縄文土器には、主なものに早期前半の大川（おおこ）式の深鉢と、中期後葉の船元式の鉢があります。

大川式土器は、奈良県山辺郡山添村の大川遺跡で初めて見つかった土器で、その特徴は、尖底の深鉢に、刻みを入れた棒状工具を回転させて文様を付けることです。

早期の遺跡は、大川遺跡の存する奈良県北東部に多数存在し、近畿でも有数の密集地となっていますが、杣ノ川イモタ遺跡も、大川式土器が見つかったことから、この一画に当たると考えられ、奈良市にもこの時期に人々が暮らしていたことが明らかになりました。

左頁　左　大川式　高　25.5cm
　　右　船元式　高　17.2cm

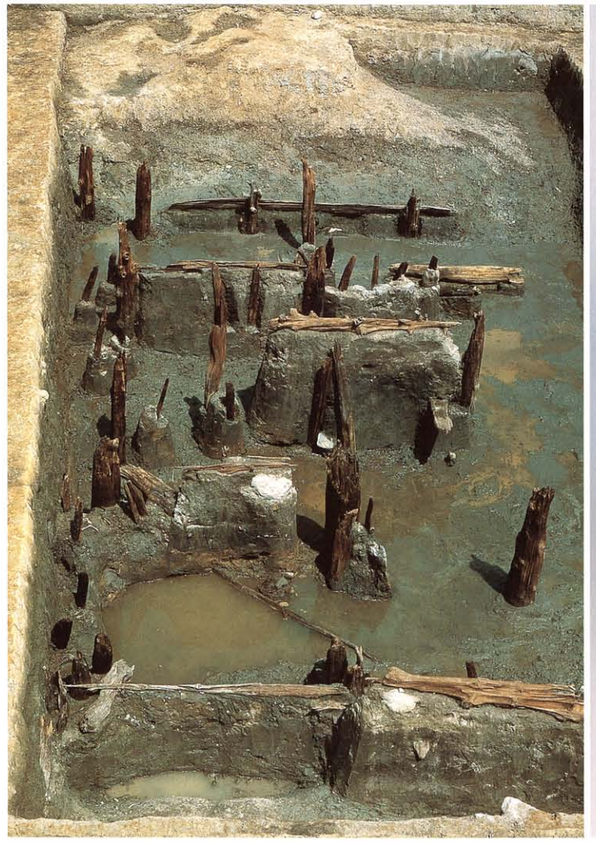
大森遺跡の弥生土器
（右頁）

大森町の弥生時代後期の土坑（穴）から、土器10点（壺8点、甕1点、ミニチュア高杯1点）と杓子形の木製品が1点出土しました。いずれの土器もほぼ完形を保って出土しており、破損したために棄てられたという状況ではありません。集落内の祭祀（マツリ）に使用され、その後に埋められたものと思われます。

また、大森から、三条、油坂（大宮町）にかけての広い範囲で、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構、遺物が見つかっており、この時代の集落遺跡がいくつか存在することがわかっています。

右頁　上　弥生土器と木製品
　　最前列の壺
　　高　21.5cm
　　下　弥生土器の出土状況

発掘された日本列島2004　地域展示「出土遺物から見た奈良市の歴史」
平成16年10月12日　編集　奈良市埋蔵文化財調査センター　発行　奈良市・奈良市教育委員会・奈良市美術館



杉山古墳の家形埴輪
（上段　左）

大安寺所在の杉山古墳は、全長154m（周濠を含めて約200m）の5世紀後半の前方後円墳です。周濠から家形埴輪がほぼ完全な形で見つかりました。周濠の外側から転落したものと思われます。

この家形埴輪は、当時の家屋の構造を知る上で貴重です。切妻造の平屋建物を表現しており、中央に出入りする扉口、その両脇と妻側に1間ずつ窓を設けています。屋根の様子は突帯と綾杉文様の線刻で表現しており、棟の上には堅魚木（かつおぎ）をのせた跡があります。堅魚木は、当時の権威や身分の象徴であり、杉山古墳の家形埴輪は、有力者（豪族）の居館を表現したものと思われます。

上段　左　家形埴輪
高　75.4cm

平城京東堀河の人面墨書土器

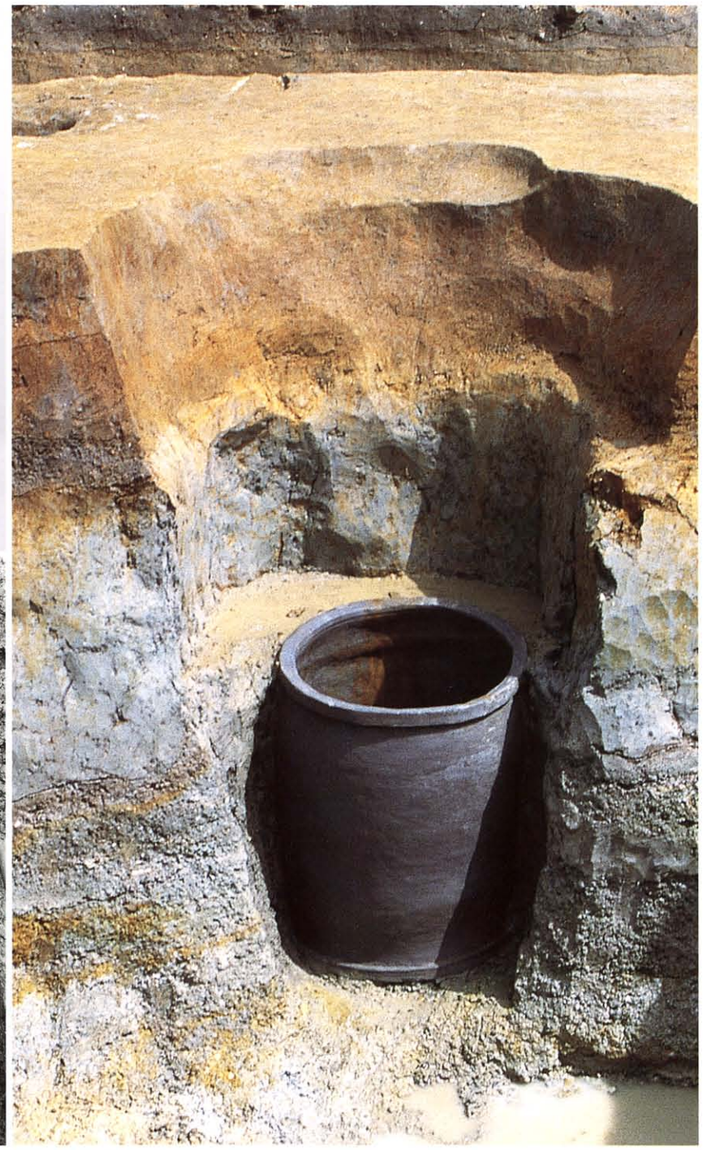
人々は、古くから、自然災害や病気などの様々な脅威や不安をぬぐうために、様々な行為（祈りやまじない）を行なってきました。こうした行為を祭祀と呼び、その形態は時代によっても異なりました。

様々な祭祀に使われた遺物の中で、奈良時代には、顔を土器（土師器の甕など）の胴部に描いた人面墨書土器があります。

土器に描かれた顔は、同じ顔はありませんが、どれも恐ろしげな表情をしており、厄病神を表しているといわれます。

東堀河などの河川や溝から出土することが多く、病気や穢（けがれ）を水に流す祓（はらい）で使用されたようです。

上段　右2列　人面墨書土器
（平城京東堀河跡出土）
右上　高　5.1cm
左下　高　8.2cm
下段　右　人面墨書土器
（平城京東堀河跡出土）
左端　高　20.5cm
左　東堀河にかかる橋



大安寺の瓦

大安寺は、聖徳太子の熊凝（くまごり）道場以来、1300年以上もの歴史を有し、奈良時代に藤原京の大官大寺から移ってきた壮大な伽藍（がらん）を誇った官の大寺です。

大安寺の主要な軒瓦は、藤原京から運ばれてきた「大官大寺式」、大安寺独自の「大安寺式」、平城宮の瓦と同笵である「平城宮系」と呼ばれるものがあります。大安寺旧境内から出土する瓦は、「大安寺式」が最も多く、全体の半数を越えています。

また、2002（平成14）年から発掘調査を続けている西塔には、これらとは異なる軒瓦が葺かれていたようです。

上段　左　　軒瓦「大官大寺式」
　　軒丸瓦径　21㎝
　中・右
　　軒瓦「大安寺式」
中段　左　　軒瓦「平城宮系」
　中　　西塔の軒瓦
下段　左　　三彩垂木先瓦
　　径　16.2㎝
　中　　鬼瓦　　高　29㎝
　中　　磚積井戸出土状況

平城京の井戸

（右下）

水は、私たちにとっても大切な資源ですが、古代の人々は井戸を掘って、水を獲得してきました。

平城京内で使用されていた一般的な井戸側（枠）は、木組でつくられていますが、左京（外京）三条五坊三坪の宅地跡（大宮町）で見つかった井戸は、底に直径約93㎝、高さ112㎝の焼物（須恵質）の井戸側を設置していました。

須恵質の井戸側の上段には、木組の井戸側があったと思われますが、抜き取られていました。

このような類例の少ない井戸側を使用しているのは、何か特殊な事情があったものと推定できます。

右下　井戸の出土状況

平城京の人形（ひとがた）

平城京左京一条三坊十三坪（法華寺町）の大型の井戸から、木製の人形が100枚近く見つかりました。人形を使った祭祀もまた、古代の祭祀のひとつで、穢れを祓ったり、病気の治癒（ちゆ）を祈って自分自身の形代（かたしろ）として作られたようです。

出土した人形には、顔が描かれているだけではなく、胴の部分に人名（「伊勢竹河」、「伊勢宗子」、「秦奈良子　又名粟日」、「伴廣冨」）が書かれていました。あるものは束にして、あるものは緑釉陶器の瓶の中に入れて、祭祀の後に、棄てられたようです。

「嘉祥元年」（848年）と墨書された石がいっしょに出土しており、9世紀後半に棄てられたと考えられます。

左列　木製人形「伊勢竹河」
　上段左端　長　14.7㎝
　下段右端　長　11.6㎝
中列　墨書土器
　上　「今井」径15.7㎝
　中　「今西」径15.7㎝
　下　「大西」径14.5㎝
右列　上　墨書のある石
　「嘉祥元年」
　高　5.3㎝
　中　人形の入っていた緑釉陶器
　高　18.1㎝

菅原東遺跡の面
（右列下段）

15世紀前半の屋敷地を囲む堀から、焼けた状態で出土しました。

木製（ケヤキ材）の一本作りで、表面の一部には、黒漆が残っています。面に特有の丸みはありませんが、こめかみに紐を通す孔があけられていますので、実際に顔につけて用いられたのでしょう。

額（ひたい）には皺（しわ）を刻み、目は細長く切り込み、眉と頬（ほお）がふくらむように表現しています。能などで使われた「尉（じょう）」（男性の老人）の面と考えていますが、老人の面によく見られる植毛の痕はありません。

発掘調査で、このような面が出土することは少なく、当時の芸能を知る上で貴重な発見です。

右列　下　面　縦　13㎝

とこれに直交する径四㎜の縦孔が開けられています。

計量値は、奈良時代の八両（一斤の半分）に相当します。奈良時代の分銅（権）の類例は、全国でも少なく、我が国の度量衡制度を知る上で、貴重なことから、一九九四（平成六）年に指定されました。

平城京跡出土の分銅（権）

平城京跡では、指定品の「銅製壺形分銅」のほかに、四点の分銅（権）が出土しています。二点は、銅製の笠形品、一点は、鉄製の釣鐘形品、また、一点は、土製の釣鐘形品です。

壺形品は、指定品（八両）の一点のみです。銅製の笠形品が、それぞれ一両、四両に相当することから、重さによって形態の違いがあったのかも知れません。

また、釣鐘形品は、鉄製、土製とも当時の重さの基準に合致するとはいいがたく、土製品については、重さを量るには適さないという考え方もあります。

なお、平城京に先行する藤原京跡からも、銅製の笠形品が見つかっています。

右列　上　銅製（平城京跡出土）　高　三・四㎝
　　中　鉄製（平城京跡出土）　高　四・九㎝
　　下　土製（平城京跡出土）　高　四・〇㎝
左列　中　銅製（平城京跡出土）　高　二・六㎝
　　下　銅製（藤原京跡出土）　高　二・三㎝

大和郡山市教育委員会所蔵品
橿原市教育委員会所蔵品

史跡「菅原東遺跡埴輪窯跡群」
（移設窯跡を含む）

一九九〇（平成二）年に発掘調査によって発見された埴輪生産遺跡で、遺構には、埴輪窯跡六基（四基は移設保存）と灰原及び窯の築造に利用された溝があります。

遺跡周辺の地名「菅原」は、古墳築造に関わった土師氏（菅原氏）の故地として文献上知られています。土師氏と古墳造営との関わりを証明する数少ない埴輪生産遺跡として、歴史的価値が高いことから、二〇〇〇（平成一二）年に指定されました。

現在、「菅原はにわ窯公園」として整備しており、移設保存された四基のうち、一基は、発掘時の状況を見学することができます。

右列　上　形象埴輪（人物の顔）
　　高　一八・八cm
　中　形象埴輪（人物の顔）
　　高　一八・一cm
　下　形象埴輪（靫）
　　高　二〇・七cm
左列　上　円筒埴輪
　右手前　高　三七・〇cm
　下　埴輪窯全景

考古資料「銅製壺形分銅」
（左頁左列上）

一九八八（昭和六三）年、平城京跡（左京九条一坊二坪）の発掘調査により、奈良時代の井戸から出土しました。

銅製の鋳造品で、高さ四・八cm、径四・六cm、重量三二九・一gです。蓋の付いた壺の形をしており、鋳造後、ろくろで整形し、仕上げています。鈕の部分には、紐を通す径三mmの横孔

史跡「野神古墳」（南京終町）

墳丘は、削られており、本来の大きさは不明ですが、竪穴式石室の内部に刳抜（くりぬき）式の石棺がみられます。石室は破壊され、東壁のみが残存していますが、破壊された部分をコンクリートで復原し、西壁に鉄柵を設けて、石棺の見学が可能となっています。

石棺を見ることができる古墳は、奈良市内ではほかになく、また、古墳時代中期末、あるいは後期の貴重な石棺例であることから、一九八四（昭和五九）年に指定されました。

なお、刳抜式の石棺は、熊本県の阿蘇産の石材が使われており、どのような経緯で、奈良盆地に運ばれてきたかが、注目されます。

中段　右　石棺出土状況

史跡「古市方形墳」（古市町）

一九六三（昭和三八）年に、奈良市水道局の宅地造成に伴って、発掘調査が行なわれました。

墳丘は、一辺が約二四mの方形で、円筒埴輪列がまわっていました。

埋葬施設は、粘土槨で、鏡（二神二獣鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡、盤龍鏡）、玉（勾玉、管玉、棗玉、小玉）、琴柱形石製品、鉄製農工具（斧、鎌、刀子、やりがんな）が出土しました。

古墳の存する古市の地域のみならず、奈良盆地の古墳時代前期の様相を知る上で、重要な遺跡であることから、一九八九（平成元）年に指定されました。

下段　右　鉄製品出土状況
　　中　鏡出土状況
　　左　粘土槨（埋葬施設）

右列　上　鉄鑿（第二埋葬施設）
　　右端　長　二三・三cm
　　下　石製勾玉
　　（第三埋葬施設）
　　右下　長　一・四cm
左列　上　鉄斧（第二埋葬施設）
　　長　八・四cm
　　中　砥石（第二埋葬施設）
　　長　三〇・〇cm
　　下　石製有孔円板
　　（第三埋葬施設）
　　右下　径　二・六cm

史跡「五つ塚古墳群」（山町）

尾根の南裾に並ぶ五基の古墳からなる古墳群で、いずれも埋葬施設は横穴式石室です。一九九四（平成六）～一九九六（平成八）年に墳丘の発掘調査を行いました。

五基の古墳のうち、三基が円墳、二基が方墳で、石室の形態から、一、三、五号の円墳が先に、二、四号の方墳が後に造られたと考えられます。円墳三基は六世紀後半、方墳二基は七世紀前半に造られたのでしょう。

後期古墳が少ない奈良市域において、墳丘、石室ともによく残っており、典型的な後期古墳の例として、貴重であることから、一九九六（平成八）年に指定されました。

左頁
上段　横穴式石室奥壁
　　（左から、二、三、四号墳）
中段　左　古墳群空中写真

奈良市の指定文化財

奈良市内には、国、県、市が指定した文化財が九八〇件あります。そのうち、奈良市が奈良市文化財保護条例により指定した文化財は、一一八件です。その多くは、建造物、絵画、彫刻ですが、遺跡や出土品で指定されているものが六件あります。四件が史跡で、二件が考古資料です。

史跡は、四件とも古墳時代の遺跡で、三件が古墳、一件が古墳に供給する埴輪を製作、焼成した窯跡です。

考古資料は、古墳時代と奈良時代のものが一件ずつで、古墳から一括で出土した副葬品と、奈良時代の度量衡（どりょうこう）を知る上で、重要な分銅があります。

考古資料

「ベンショ塚古墳出土品」

ベンショ塚古墳（山町）は、周濠のある全長七〇mの前方後円墳です。一九九〇（平成二）年に、稲荷神社の建設に伴って、後円部頂と墳丘の一部の発掘調査を実施し、後円部頂で、三基の埋葬施設を発見しました。

そのうち、第二埋葬施設には、鉄製品を中心とした副葬品が良好に残っていました。出土状況も明確であり、また、中期古墳の副葬品の代表例として、学術的価値が高いことから、一九九七（平成九）年に指定されました。

特に甲冑は、革綴から鋲留への発展の過程を示し、馬具は、朝鮮半島から伝わってきた当初の特徴がみられる点で、注目されます。

ベンショ塚古墳の指定遺物

第二埋葬施設副葬品

武器・武具
- 甲冑　一領
- 三角板革綴短甲
- 小札鋲留眉庇付冑
- ヤリ先　一本
- 鏃　一括
- 柳葉鏃　三九本
- 長頸鏃　一括
- 馬具　一組
- 鞍金具　前輪（まえわ）
- 後輪（しずわ）
- 雲珠（うず）
- （環一・脚金具八）
- 鉸具（かこ）二個

工具
- 鑿（のみ）三本
- 斧　一本
- 針　一括
- 砥石　一個
- ガラス小玉　二四五個

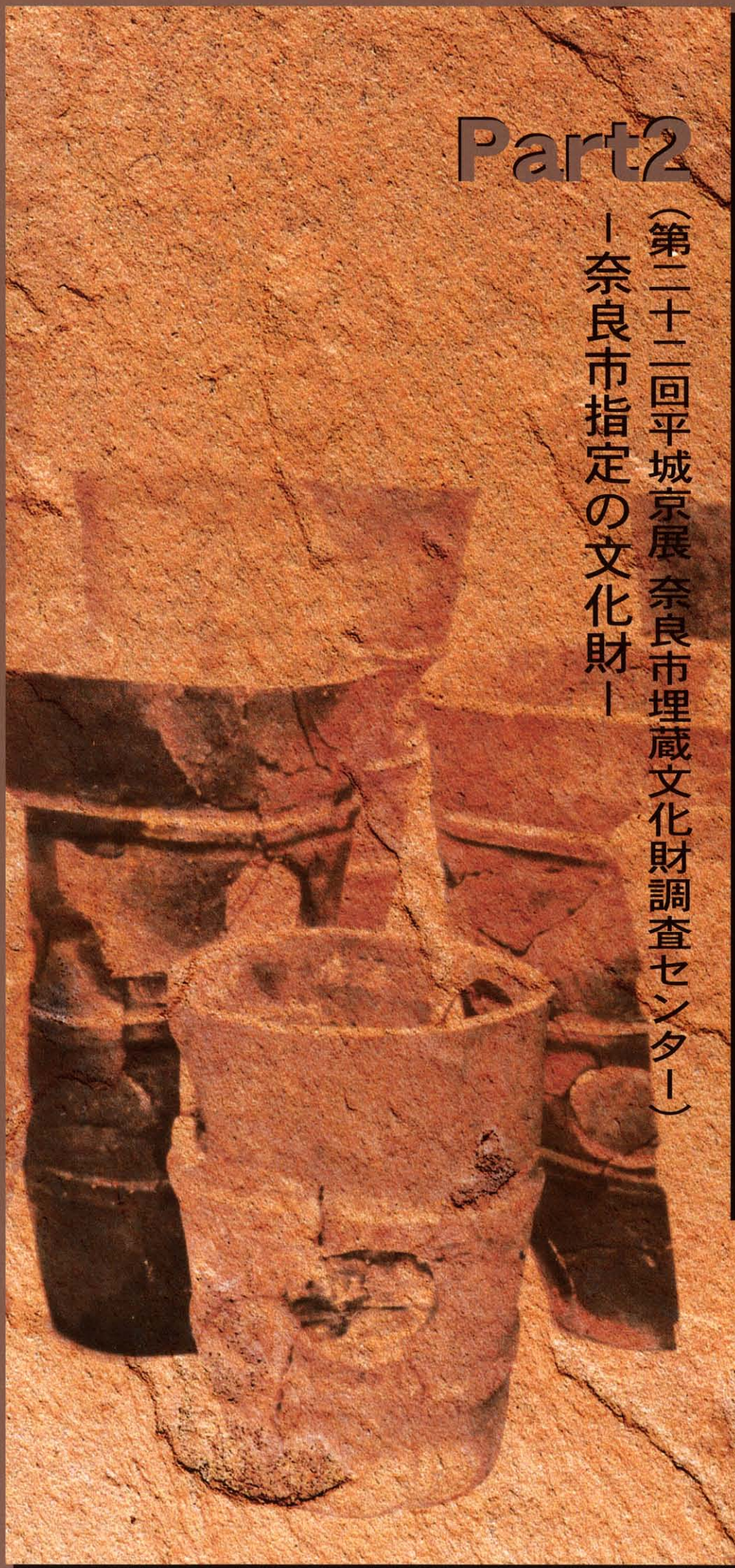
右　甲冑（正面）第二埋葬施設
中　同　（側面）同
左　同　（背面）同
短甲　後胴高　四二・〇cm
眉庇付冑　全高　一五・八cm

発掘された日本列島 二〇〇四

地域展示

「出土遺物から見た奈良市の歴史」

Part2

（第二十二回平城京展 奈良市埋蔵文化財調査センター）

―奈良市指定の文化財―